

2026 年 9 月 27 日（聖霊降臨後第 18 主日、A 年特定 21）

メッセージ

「立ち帰って、生きよ」

（マタイによる福音書 21:28-32）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音でイエスがたとえ話をしている相手は、祭司長や長老たちです。宗教的権威者であった彼らには、律法をよく知り、よく守っているという自負があったことでしょう。その彼らは、このたとえでは「弟」に重ねられています。弟は答えました。「はい、お父さん」。この原語原文は、「わたしは準備できています、主よ」と訳すことができます。つまり、父親の言葉にすぐに応じる、自信に満ちた返事です。たしかに、祭司長や長老たちは、神の指示に従おうという気持ちを持っていたことでしょう。しかし、人間は神の指示を、神が望むように完全に果たせるのでしょうか。もしできるなら、人間はとっくに神に立ち帰り、この世界には平和が実現しているはずです。それができないから、今の世界の現実があるのです。にもかかわらず、その現実を自分もつくり出していると認められない。そこに、人間の罪深さと弱さがあります。この「弟」も、返事こそ威勢が良かったものの、実際には出かけませんでした。

他方、「兄」は「徴税人や娼婦」に重ねられています。当時、徴税人や娼婦たちは、律法を守らない者として軽蔑されていました。社会的な立場は、祭司長や長老たちとは対極にあります。多くの人は、徴税人や娼婦たちよりも、祭司長や長老たちの方が正しいと言うでしょう。しかし主イエスは言います。「よく言っておく。徴税人や娼婦たちのほうが、あなたがたより先に神の国に入る。」続けて、「なぜなら、ヨハネが来て、義の道を示したのに、あなたがたは彼を信じず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ」と言われます。なぜなら、ヨハネの悔い改めの呼びかけを、多くの徴税人や娼婦たちは聴き、受け入れたからです。

彼らは、自分たちが神の御心になっていないことを自覚していたのでしょうか。「兄」のように、はじめは「いやです」と言って、主の道から外れていました。しかし、自らの生き方に痛みを感じてもいたのでしょうか。その痛みが、後で考え直すきっかけになったのではないのでしょうか。傷が救いの入口になる、とでも言いましょうか。自らの姿を素直に見つめるところに、悔い改めは起こるのです。

徴税人や娼婦たちのように、自分の過ちを勇気を持って見つめ、それを認めるとき、その過ちは恵みに出会うための機会へと変えられます。わたしたちが今日、自らの過ちを認め、自分の正義ではなく神の正義に立ち帰るなら、わたしたちのどのような過去も、神に出会うための恵みへと変えられます。